

はしがき

本研究は平成 25 年度日本大学経済学部産業経営研究所研究プロジェクト（一般研究）「文化政策と公共文化施設のマネージメントに関する国際比較」の成果報告書である。研究期間は平成 25 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日までの 2 年間で、メンバーは次の 4 名である：研究代表者 安田静（日本大学教授）、村田和彦（同大学教授）、村田直樹（同大学教授）、清水純（同大学教授）。

プロジェクトメンバーの専門領域は多岐にわたり、安田は表象文化論及び舞踊学・舞踊史を、村田和彦は経営学、村田直樹は会計学、清水純は文化人類学をそれぞれ専門としていることから、今回の研究ではそれぞれの担当地域について、自らの専門分野での研究方法を生かして分析・考察を進めた。なお、第 I 部から第 IV 部までの研究対象国は、公的予算からの文化活動への援助が最も充実している順に並べた。

従って、本報告書の構成は次の通りである。

第 I 部ではドイツの公共劇場を対象にとりあげ、第 1 章では村田和彦が経営学の視点から、ドイツの『劇場統計』という資料をもとに詳細に分析した。また第 2 章では安田静が、デュッセルドルフ、ハンブルクなど現地での取材に基づき、目覚ましい活動を繰り広げるいくつかの劇場・カンパニーについて、レポートリー分析を含めてマネージメントの実体を吟味した。

第 II 部は安田静が担当した。フランスの最も巨大な公共劇場であるパリ・オペラ座を対象として、第 1 章ではアボネの特権に注目し、劇場マネージメントの歴史の変遷、とりわけ重要な転換点となった 19 世紀前半と 20 世紀半ばの「事件」を分析した。また第 2 章では、「あらゆるひとのためのオペラを」という 80 年代のミッテラン大統領以来の理念を核として、オペラ座のマネージメントがどのように変遷してきたかを探るとともに、直近の財務状況の分析を通して、フランスの公共劇場の問題点や今後の方向性について考察した。

第 III 部では会計学の視点から、村田直樹がイギリスの代表的公共文化施設を 2 箇所とりあげて分析を行った。具体的には大英博物館と英国ロイヤル・オペラについて、当該施設から貴重な詳細資料を得て精密な財務分析を行い、ドイツやフランスなど国や自治体から莫大な公的予算を受け取っている劇場の事例とは対照的な実情を明らかにした。

第 IV 部は文化人類学の視点から、清水純が台湾における博物館展示と舞台芸術という 2 つの文化活動領域を研究対象として取り上げた。国家のアイデンティティの確立が必要な時期にあって、台湾における文化政策あるいは劇場のマネージメントは、いずれも先進諸国に倣い財政改革を模索中であり、その変遷経緯を踏まえて考察を行った。

今回は 4 カ国について、各担当者の専門分野に密接に関連する研究手法で分析と考察を行ったが、今後の研究課題としては、ドイツ、フランス、イギリス、台湾のすべての地域について、それぞれ経営学、芸術学、会計学、文化人類学の分析手法に基づく考察を加えてい

くことがのぞまれる。

また、その分析対象も、パリ・オペラ座やロイヤル・オペラのような巨大組織だけではなく、やや小規模な組織へと範囲を広げて行くことが必要であろう。ケース・スタディとしての本研究を出発点として、今後はより網羅的かつ多面的な研究へと発展させてゆく所存である。

プロジェクト代表 安田 静